

子どもが解決する（大人の手助けあり）

校長 山田 浩之

その教室では「いじめ見逃しゼロ宣言」の宣言文を考えていました。担任が「宣言文を学級全員で一から考えるか、代表の人に文案を作ってもらってから検討するか」を問うたところ、多くの子どもが学級全体で考えることを選択しました。ある子どもは、その理由として「一人一人が向き合う必要があるから」と答えました。

子どもは、いじめや子ども同士のトラブルが、起きないように道徳や学級活動などで繰り返し学んでいます。しかし、いじめもトラブルも、今すぐなくなるという見通しをもつことはできません。今年度、新潟小学校で確認されているいじめは、昨年度よりも減少していません。

「起きてしまったトラブルに私たち教員は、どのようにかかるとよいか」いつも、解決の最適解を探っています。教務室でも、どのように対応すべきか、日々のトラブルに対して検討がなされています。学年の発達段階にもよりますし、関係した子どもの行動傾向や子ども同士の人間関係にもよります。前に起きたケースなども参考にしながら話し合っ取組が決まります。

トラブルについて実際に子どもと向き合う時、私たちは、まず事実の確

認や子どもの気持ちに寄り添うこと、そして子ども自身が自ら取った言動にしっかりと向き合えることに注力します。その上で、何をどのようにこのトラブルから学ばせるのかにも心を砕きます。子どもは、「○○をしなればならない」、「○○をしてはいけない」ということを大抵分かっています。ですから、よいか悪いかだけでなく、どうやって人間関係を構築し直すのか、どうやったら同じことを繰り返さないようになるのかを考えさせ、納得できるようにさせることを大切にしています。

子どもは（大人もですが）、失敗からたくさんのことを学びます。私たち大人にとっても、良好な人間関係の構築は一筋縄ではいかない課題です。子どもも同じです。大人がやるべきことは、解決方法を押し付けるのではなく、解決には、複数の選択肢があることを教え、子どもたちに考えさせ、自己決定させること、そして仮にトラブルになっても大人が適切に手助けすること、子ども自らの手で解決や改善がなされるという見込みをもたせることです。それは、トラブルがまったくないという安心感よりは下がりますが、結構強い安心感となると思っています。